

## 書き方が上手になる秘訣 讃める教育

私が担任した学級の子供たちは皆、他の学級の先生方が驚嘆してくれるほど美しい字を書きました。さうなった理由は、次の二つだと思います。

一つは、書き方の手本の上にトレースペーパーを載せて写し書きをさせた事です。これは形の好い字が楽々と書け、然も、手本の字からかなりはみ出した場合でも、手本の上から外して見ればそれが見えなくなり、「我ながら好く書けた」と思へる為に、子供たちは喜んで書きます。それこそ何枚書いても飽きる事を知りません。だから、自然と上達するのだと思ひます。

次は、子供たちの書いた作品は、決して直さない事です。そして、<sup>まる</sup>の大安売りをする事です。「とても良く書けました」とか「前よりとても良くなりました」とか、子供を喜ばせる言葉を書いてやる事です。さうすれば、子供たちは家でも一所懸命に練習して来て、それを提出してくれます。

書き方は、子供たちが意欲的に練習しさえすれば、何の指導をしてやらなくても必ず上達して止まないものです。どんなに下手な子供でも、沢山書けば必ず上手になります。だから、子供に意欲的な練習をうんとやって貰ふ事が何よりも大切です。

だから、どんなに下手な字でも、私は決して直さないのです。直されると誰だって不愉快になるに決つてゐます。不愉快な気持では意欲的な練習は出来ません。下手な字でも、「良く書けました」と讃めてやった方が、直してやるよりも効めがあります。

子供は、自分が書いた字のどこが悪いのかは、書いてゐる時点で既に判つてゐるものです。それが判らない子供はゐません。直してやらなければ判らない、といふものでは無いのです。だから、直してやる必要は無いのです。

直してやって子供の気分を悪くさせたら、意欲的な練習が出来るわけがありません。それよりも「前より良くなりました(前より悪くなる事はまづありません)」と書いてやって気分を好くさせてやった方が必ず良い結果が出ます。

どうも教育熱心な先生ほど、骨折って子供の字を直してやり、子供の意欲を削ぐことに努力してゐるやうに思へてなりません。子供は意気込んで書くやうで無いと、決して上達しません。それには讃めてやって好い気分にならせてやる事が一番です。

もっとも、既に上達してゐる子供や、意志の強い子供の場合には、悪い所を見付けて教へてやることは有効です。弱い火は、風を受けると熱を奪はれて消えてしまひますが、強い火は、風を受けると益々火力

を強めます。子供もそれと同じで、悪い点を直されると<sup>くもげ</sup>悄気てしまふ子供もゐれば、その反対に奮起する子供もゐます。

ただ、既に上達してゐる子供や、意志の強い子供は、先生が悪い所を見付けて教へてやらなくても、自分で反省して悪い点を直し、向上して行くだけの力を備へてゐますから、特に悪い所を見付け出して教へてやる必要も無いと思ひます。それで、総じて「骨折って子供の字を直してやるよりも、よく書けましたと言って讚めてやる方が好い」といふわけです。